

日本における天王像「帶喰」の意味―「河伯面」に着目して―

大沼 陽太郎（東北大学）

天王像一すなわち四天王像や二天王像、毘沙門天像一の身体各部に施される所謂「獅嚙」装飾は、特に日本では奈良時代以降近世に至るまで広く見られ、またその造形のバリエーションも豊富であるが、これまで特に日本彫刻史研究において本格的に取り上げられることは少なかった。

本発表では、そのなかでも特に腹部に施される「帶喰」に着目する。「帶喰」は8世紀中盤以降多くの像に施されるようになるが、その形は「獅嚙」といわれるように獅子を表すもの（奈良・東大寺法華堂四天王立像）から、龍形をとるもの（奈良・興福寺南円堂広目天立像）や人面に近い形象をとるもの（京都・興禅寺毘沙門天立像）まで様々である。このうち龍形でかつ有脚の帶喰については、その造形が舞楽面中の陵王面と共通し、鎌倉初期以降特に奈良仏師によって用いられたことが既に指摘されているが、その意味するところは未解明である。また、たとえば四天王のうちで一部のみ「帶喰」が表されるなど（岩手・黒石寺四天王立像等）、「帶喰」は天王像に必ず表されるものではなく、なんらかの意図をもって選択的に装用されている事を窺わせる作例も多い。

本発表は、こうした「帶喰」の装用、あるいは造形の意味について理解する鍵として、「帶喰」を「河伯面」とであると述べる文献史料に着目する。たとえば『阿婆縛抄』は毘沙門天の「帶食」は「河伯面」であり、これは胎藏界曼荼羅の門上装飾と同じであると述べる。また『壺囊抄』は「河伯面」の装用は毘沙門天に限らず、「河伯」は中国の河川神「馮夷」を表したものであると言う。

毘沙門天像の「帶喰」に着目した記述は、唐代では特に毘沙門天像に「帶喰」を施す例の多い事を背景とし、平安期に四天王像中多聞天像のみに「帶喰」が施される作例の典拠となった可能性が高い。また「馮夷」は伝統的に龍と強く結びつき、更に胎藏界曼荼羅の門頭には有脚の獣形が表される場合もある。こうしたことから、鎌倉期以降に奈良仏師によって採用された有脚の龍を表した帶喰は「河伯面」を意識した造形である可能性が高いことがわかる。また人面であるとされることもある「馮夷」が「河伯面」であるとすれば、人面の「帶喰」もこうした言説に依拠していることも考えられる。

以上のとおり本発表では、天王像における「帶喰」の選択的装用および造形の意味を、「河伯面」というキーワードをもとに明らかとする。この成果は、従来ただ腹部の「獅嚙」として説明されるのみであった「帶喰」について、その名称と意味を明らかにすることに繋がる。このことは各時代にさまざまな造形をとる「帶喰」について、「河伯」という共通した観点からの分析を可能とし、彫刻史研究に新たな視点をもたらすと期待できる。